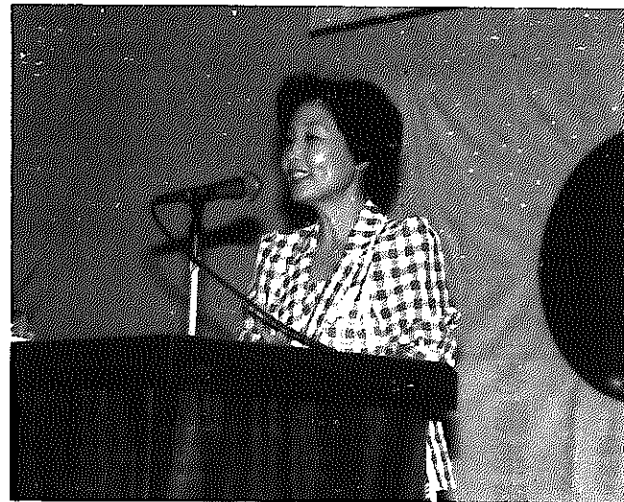


家庭もよう

海老名香葉子さん

先日行われた社会福祉大会の記念講演から、嫁と姑の心の触れ合いを中心に、その一部を掲載します。掲載にあたっては、著書「姑うた様と」を参考にさせていただきました。

体を使って働くのももちろん「働く」だけど、女の人の働くつていうのは、他の者を楽させることを「ハタラク」つていうのよ。もつと言えね、家の中を明るくさせることがあなたの役目なんですよ。



▲海老名香葉子(えびな かよこ) 昭和8年、東京に生まれる。昭和20年3月の東京大空襲で、兄一人を除き、一家6人を失う。昭和27年落語家林家三平と結婚。昭和55年三平師匠没後も、弟子林家こん平とともに一門を守る。そのかたわらエッセイストとしても活躍。主著に「姑うた様と」「しろの正面だあれ」がある。長女美どり、次女泰葉、長男泰孝(林家こぶ平)、次男泰助の母。

いいですねえ、お年寄りがあんなに強く生きてる……

白根に参りましたら、見渡す限り田んぼがずっと広がってまして、「さすが新潟だわ、いいですねえ」つて言っていたんです。そうしたら道のすぐわきを、おばあさんが運搬用の手押し車でしょうか、こう押してたんです。思わず「お、いいわねえ」つて拍手しちゃったんです。お年寄りがあんなに力強く生きてるなんて、すごいいなあと思いました。私もがんばらなくちゃ、と思ったんです。弟子のこん平が、このあいだの

お盆のときに、私に一生懸命新潟の盆踊りの歌を教えるんです。合の手を入れて歌うんですよ。へ盆だてえにヨォー、ナスの皮の雑炊だア、どうしたどうしたつていうんですが、それをずっと歌ってたんです。故郷をしのんで歌ういい歌だなあと思いました。私はいつも「おかみさん」と呼ばれてまして、りっぱな話はとてもできません。体験だけでございませう。笑い話と思っただけ聞いていただきたく思います。

暖かい布団に寝たとき、ああ、これで助かったと……

昭和二十年三月の東京大空襲で一家六人を亡くしまして、戦災孤児になってしまいました。親せきや知人を転々としていたときに、父の知り合いだった先代の三遊亭金馬師匠と巡り合ったんです。「いやあ、生きてたのかい。良かったねえ」つて言われまして、その日のうちに拾われたんです。師匠の家の暖かいお布団に寝たとき

下町の



には、ああ、これで助かった、と思いました。「学校へは行かせてやれないけど、女ひととおりのことを覚えて、早くお嫁に行くんだよ」と言われまして、師匠の家のお手伝いさん兼居候ということでお世話になったんです。そして、三平の母に巡り合いました。

寒の朝、丈夫そう
でいいわね、と言
われて……

金馬師匠の家は、東京の上野の中根岸というところにあつたんです。三平の家は上根岸です。この道のりが歩いて十五分ぐらいありました。

昭和二十七年の寒の朝のとても寒い日だったんです。朝の掃除が私の役目だったので、すっかり終わらせて、最後のぞうきんバケツの汚くなった水を、外のアスファルトへ勢いよくまいたんです。そこへ、三平のお母さんが、朝の散歩でしょうか、お豆腐屋さんへでも来たんでしょうか。グレーの手編みの大きな肩かけをしましてね、そのぎりぎりのところに私、水をまいたところを見ました。「すみません！かかりますんでしたでしょうか」

「いいのよ、だいじょうぶよ、だいじょうぶ」
「冷たくないの？」
「冷たいよ、指先がちよつと赤くなつてたんですね。それを

足で踏んで履いてました。でも、冷たかったせいか、指先がちよつと赤くなつてたんです。それを

見たおかみさんが、冷たくないのと言つてくれたんです。

「はい、私、元気なんです」
「そう、元気そうでいいわねえ」と言つた後から、「丈夫そうでいいかもしれないわね」と言つてくれました。それがきっかけで、三平のところへ嫁に行くことになりました。

「あそこはお母さんがいいからお行き、お行き」と大人たちが勧めてくれました。あつという間にお嫁に行く話が決まっちゃったんです。縁つて不思議なものだと思ひます。あつとき、足袋や靴下を履いていたら、今ごろこんなことにはなつてなかつたんじゃないかと思ひます。

「思えば思われる」
でやつていきまし
よう……

花嫁衣裳のままの私が、ぬれ縁から腰をかがめて、四畳半二間の家の上がりました。一歩入つて、ふと前を見たら、何と、一足先に入つていた三平が、あぐらをかいてたばこを吸っているんですよ。初めて二人で映画を見に行ったときには、「僕は酒もたばこもやらない」とまじめな顔をして言つたのに。「あら、」つて言つたら、あわてて「すみません。すい



ません」ともみ消してました。私、夫の「すみません」を聞いたのが家へ一歩入つたと同時だったんです。そのとき、姑があわてて言ひました。「かよ子さん、悪く思わないうでください。この子はね、あなたに来てもらいたい一心で、うそついでにやつたけど、ほんとうは酒もたばこもやるのよ」と。

仏様にお線香をあげました。手を合わせて座り直し、お姑さんとひざを合わせて向き合つたんです。「よろしく願ひします」
「頼むわよ。あのね、女の人は働かなくてはだめなんですよ」
「はい、お姑さん。私、一生懸命働きます。丈夫ですから、元気で一生懸命やります」

「うん、もちろんね、体を使って働くのも、働く、だけど、女の人の働くつていうのはね、他の者を楽させることを「ハタラク」つていうのよ。他の者を楽させる、